

氏 名：村方 多鶴子
学位の種類：博士（看護学）
学位記番号：甲第 130 号
学位授与年月日：2015 年 3 月 10 日
学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論文審査委員：主査 萱間 真美（聖路加国際大学教授）
副査 堀内 成子（聖路加国際大学教授）
副査 廣瀬 清人（聖路加国際大学教授）
副査 上別府圭子（東京大学大学院医学系研究科
健康科学・看護学専攻家族看護学分野教授）

論文題目：精神障がいをもつ女性が結婚・出産・子どもとの関わりを通して他者から受けたエンパワメントの主観的体験

博士論文審査結果

本研究は、精神障がいをもつ女性が、結婚・出産・子供との関わりを通して、他者から支援を受けながらどのようにエンパワメントを体験しているのかを記述し、有効な看護職の支援について示唆を得ることを目的として行われた。女性が自らの選択を支持され、病気との闘いを続けながらも支援者からの助けを得て、自分と子ども双方の幸福を追求するためには、女性自身がエンパワメントされる必要がある。自分が幸福を追求してもよいのだと思えるようになるプロセスは長い経過を伴い、一つ一つの支援が積み重なって力になっていくことを、当事者のナラティブ（語り）によって描き出したことが本研究の社会的価値とオリジナリティであり、この点は評価された。

研究デザインは、質的記述的研究であった。データ収集は精神障がいをもつ 20 代から 50 代で、25 歳までの子どもに関わってきた 11 名の母親を対象にインタビュー調査を行った。インタビュー対象者の診断名は統合失調症 7 名、双極性障害 1 名、うつ病 3 名で、全員が発病後に出産していた。インタビュー逐語録を継続的比較分析法を用いて分析し、当事者が体験したエンパワメントのプロセスを表現するカテゴリを抽出し、さらにコアカテゴリを抽出した。

母親たちは、うまくいかない体験を繰り返して人生に絶望し、自信をなくしてものごとを決断できないと感じていた。しかし、支援者から決断の正当性を保証されて自分が幸せになりたいと願い、行動を起こし、支援者の身体的・心理的なサポートを受けることによって子どもと関わりたいと願う気持ちを持ち続け、子育てのつらい時期を乗り越えることができたと感じていた。また、今後も何かあれば助けてもらえると感じられることで、これからも自分が子どもを育てていきたいと思うことができていた。このプロセスは、結婚・出産・子どもとの関わりを通して、他者からエンパワメントされ、母親であり続けたいという思いを引出し保証され続ける体験であった。さらに、一旦自信を得ても、再び病状悪化や無力感を体験する繰り返しがあり、常にエンパワメントが必要であることを概念図によって示した。

審査では、カテゴリが表すエンパワメント体験の主体と一貫性、一旦エンパワメントされても再び不安や混乱に陥る循環性、自信を得たり失ったりという Up and down が十分に表現できていないという問題点について指摘された。この点は、表現を調整し、エッセーのリトグラフとペンローズの図の意味を詳細に説明することによって説明を補強した。考察に関しては、カテゴリのレベルで他の研究や概念との関連を十分に論じることが必要との指摘があり、考察を再検討した。母親のエンパワメント体験が直線的に進むのではない点に関して、考察でもさらに言及した。その他、誤表記などについて修正を行い、審査員の確認を得た。

前述のような課題はあったものの、着眼点、関心、研究プロセスを自律的に行う能力を身につけており、研究領域では優れた研究結果であることが評価された。以上により、本論文は、本学学位規定第5条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。